

<第四十五話> 平成三十年六月六日

断腸

床の中で目を覚ます。背を夜具に着けたまま、軀を左右に揺する。
「間質」を揺する。ヒトの器官で最大、体重の16%を占める皮膚でなく、皮膚を上回る大きさの“器官”、体重の20%に相当する体液で満たされ「間質」を揺する。
血管、臓器、筋肉が正常に機能するよう、また免疫機能が高まるよう「間質」を揺する。

*

縄文人は、腹（腸）に生命を宿す仕組みが隠されていると信じた。腹（腸）に心が宿っているとの信仰を持つ。切腹の源流。
縄文人Y染色体を20%残す拙者。腸に何かある、腸は只者でないと感じる。それは上泉伊勢守や宮本武蔵の遺文からそう察するようになる。
そう、十年前あたりから床の中で目を覚ますと、軀を左右に揺すっている。体重の20%に相当する「間質」を揺すっていたのだ。

*

腸、ハラワタとも読む。
腸が腐る／腸がちぎれる／腸が煮え返る／腸が見え透く／腸に染みる
腸を切る／腸を断つ
縄文人の「腹に心が宿る」痕跡を十分に残している。

*

慣用句に「断腸の思い」。武士語と思われるが違う。腸がちぎれるほど悲しい。悲しみに堪えられないとの意味。
武士語はズバリ、「断腸」。腸を絶つ。悲しみに堪える、のである。
「断腸」にはスゴイ、心身エネルギーが必要だろう。で、毎朝、「間質」を揺するのである。

*

大正時代に流行った歌「ダンチョネ節」。節を使っているんな替え歌が作られた。予科練生の中の洒脱な奴も替え歌をつくった。

♪ 沖のかもめと飛行機乗りは
どこで散るやらネ
ダンチョネ
俺が死ぬとき ハンカチふって
友よ 彼女よ さようなら
ダンチョネ ♪

手足も揺らさせるが腸を揺するのが目的。いや、腸にメッセージを送るとった方が正しい。「今日も頼むぞ」

数年前、腸は第二の脳と聞いた。合点がいった。

腸は只者ではない、曲者だと察していた。

床の中で目を覚ます。軀を左右に揺すってから枕元のスマホで二新聞を読む。「主要」も「国内」も「世界」も読まない。「科学」と「IT」を読む。

体重のおよそ16%を占める皮膚より大きな、新たな器官が発見された。

《》皮膚の下にあり、消化管や肺、泌尿器系に沿ったり、動脈や静脈、筋膜を囲んだりしている層は、従来、結合組織と考えられていたが、実は、体液を満たし、相互に連結し合う区画が、全身にネットワーク化されたものであることがわかった」と《》(抜粋)

体重のおよそ20%に相当する体液で満たされた間質

臓器や筋肉、血管が日常的に機能するように組織を守る“衝撃緩衝材”のような役割を担っている。

縄文人は、腸には心があると合点していた。

心がどこにあるか。一万年たっても、まだわからない。